

大樂毛物語

5

すにしても、それだけの所要時間をちゃんと計算に入れていたのだから、

るに違いない。その辺のところが不思議であり、とても知りたいところである。半ば若者、教育

日間もの遠路であつたと
いう（厚岸国泰寺、住職
赴任の記録）。しかし航路
は丸2日で着いた。絵岡
に戻るが、中景はシリト

（知人）岬から西、乾（いぬい）北西）にかけて大
きく湾を形成し、当時これをクスリ湾と呼んだ。

る青年が多い現代と、衣食住に欠いた彼らとの間に、何が不足し何が満たされていくのだろうか。

何といつても「衣食住」

This high-angle black and white photograph captures a sprawling urban landscape, likely a city in East Asia. The scene is dominated by a dense concentration of buildings, ranging from small, single-story houses to larger, multi-story apartment complexes and industrial facilities. A complex network of roads and elevated highways cuts through the city, with several major thoroughfares visible as dark, winding lines. In the lower right quadrant, a large industrial complex is prominent, featuring numerous interconnected buildings, storage tanks, and what appears to be a cooling tower or chimney. The surrounding terrain is relatively flat, with some green spaces and smaller clusters of buildings visible in the distance. The overall impression is one of a rapidly growing and densely populated urban center.

船に乗つてよくたどり着いたものだと思う。そして、これまた今の人間が勝手に推察することだがどんな荷物をどんな船に、船で何を食べて、何日かかつて、さらにどんな期待をもつて来たのだろうか。

何を想うか20歳の青年

道東の自然を捉える

函館よりエリモ岬を歩

函館よりエリモ岬を
わし、十勝沖を航海しま

から雄阿寒岳を見てクニ

リ泊まで航海したに違

ない。まだ鉄路を出船

に、日高山系、エリモ

陸路の函館より馴路は約

陸路の函館—釧路は約

禄高をつぶした鳥取藩士たちが、明治に入つて鉄路にやつてきた。今から115年前のこと。
「10年ひと昔」だが、100年以上も前のことになると、キンさん、ギンさんはやつぱり大昔だ。

思つてしまふその頃、一つ里は4キロなら、ちよつと隣村八里なら32キロ。車なら20分ぐらいで着くが、昔は歩いて半日、一日の話だ。決して大げさでなく不便であつたことは間違ひない。しかし、便利とかいう感覚は今の人間が勝手に言つてゐるところで、当時の人にとってそれが当たり前。用事を

何を想つか20歳の青年
船の中に20歳の青年がいたであろう。15—16歳の若い娘さんもいたことだろう。当時の彼らは「時代」をどう認識し、自分の将来をどんな風に描いていたのだろうか。現代に生きる若者との対比で、きっと何かがわかつてくる

道東の自然を捉える
函館よりエリモ岬を走る
わし、十勝沖を航海しが
がら、船乗りたちは洋
から雄阿寒岳を見てクエ
リ泊まで航海したに違
ない。また釧路を出航す
るときは、両阿寒岳を走
に、日高山系、エリモ岬
を目印に航海した。当
陸路の函館→釧路は約

地点に家が一軒ボツンと見える。大染毛は当時人がまだ住んでおらず、畠生所の小屋があるだけだった。何としても衣食住。やっぱり「食」だ。勇団鉄路に乗り込んだ彼らは、待っていたのは、鳥取ではない霧であり、肌寒い夏であった。

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨ・ム・ヨ・ドー・シン
0120-464-104
または右記販売所へ

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228